論文

社会主義・共産主義的世界観の特質と問題点

剰余価値学説と唯物史観の批判的検討(3)

筒井正夫
Masao Tsutsui
滋賀大学 経済学部 / 教授

目次

はじめに
Ⅰ　剰余価値学説とその問題点
・・・以上前々号
Ⅱ　唯物史観とその問題点
1　概説
2　問題点
(1) 下部構造の上部構造規定論について
・・・以上前号
(2) 社会構成体の歴史的移行論について
・・・本号
(3) 経済的社会構成の継起的発展段階論について
・・・以下次号
おわりに

Ⅱ　唯物史観とその問題点

2 (2) 社会構成体の歴史的移行論について

マルクスは、唯物史観の公式のなかで社会構成体の発展の原動力を、下部構造における物質的生産諸力の発展と捉え、それが一定の段階に達して既存の生産諸関係が桎梏となり、矛盾する関係に至った時に社会変革の時が始まり、階級闘争による社会革命を通して成長する生産諸力に見合った上部構造（政治体制等）が産みだされて新たな社会構成体へと転換していくと説いた。ここでは、まず下部構造、上部構造のそれぞれについてこうした進歩発展史観が妥当かどうかを検討し、その上で社会構成体の移行論の問題点を指摘しよう。

1) 下部構造の発展論について

マルクスは、唯物史観公式の③の冒頭において、「経済的社会構成が進歩してゆく段階として」（濁

点は引用者）と記して、アジア的以下の継起的生産様式を挙げており、明らかに下部構造である社会構成の歴史的変化を段階的進歩と捉えている。

だが経済的下部構造についても進歩の概念は当てはまるのであろうか。例えば封建社会における手仕事でなされる家内工業や職人の生産と近代資本主義社会における機械制大工業生産とでは、その生産される製品の量、スピードを比べれば後者の圧倒的な勝利である。数量やスピード（速度）といった量的基準ならば明確に進歩と言えるだろう。また化学染料や石油化学製品等の新素材を用いて、新規のデザインや色彩を纏って新機能や便利さを備えて人々の心的欲求に応えていることも確かであろう。

だが、柳宗悦が繰り返し強調したように、手仕事の工人が各地域固有の原材料を十分意を払いながら用いて熟練の手業で心を込めて作った民衆的工芸品には機械制の大量生産品とは異なる質感がある。そこには、均質で画一的な機械制の製品に比べ、地方素材を用いた手仕事ゆえ、工人の心遣いが直接製品の細部にも全体にも現れて個々の品々に微妙な差異と特性が生まれ、しかも観賞用の美術品と異なり日常生活での酷使に耐えうる丈夫さと使いやすさを備え、使えば使うほど使い込みによる変化が生まれて愛着が増してゆくような独特な質感が宿る。それは、自然（素材）―作り手―製品―使用者との間に、直接心が通い合う関係が維持されるからにほかならない。手仕事の工芸品には、このように機械による大量生産の品々と比べても、劣らない質的な要素が存在している。

また自給経済を営む百姓は、家族や親しい者たちのために米や畑作物を栽培するが、その傍ら、自給用に棉花を栽培し綿糸を手紬して手織りで衣類や夜具を作り、桑を栽培し養蚕を行って繭を取り生糸を製して絹織物を作り、同様に麻布も製した。食糧も米や五穀のほか漬物・味噌・醤油・納豆・酒といった繊細で微妙な発酵技術を要する製品も自ら製造した。これら玄米に五穀、発酵食を基本とした当時の日本食は、1970年代にアメリカ議会上院のいわゆるマクガヴァン報告において専門の医学者・食文化学者等を擁して調査した世界の食文化のなかでも最も健康的な優良食であると評されたほどである[1)]。

住居も、萱の手入れや補給、日常の修繕などは自力で行った。農具の修繕から藁を用いた草鞋・莫蓙・蓑なども家族で作った。このように、百姓は単なる農業専門職ではなく、あたかも百の姓を有するかのように衣食住其他生活と生産に係わるあらゆる業務を独力で、あるいは家族や時に村民と協力して行う「万能の職人」ともいうべき多様な能力を備えており、自然素材の原材料の性質を熟知し、それを熟練の手業で加工する技術と知恵を有していた[2)]。

生産力の発展とは、こうした自給的農工一体の経済に商品経済が浸透し、社会的分業が進展して徐々に農工が分離し、さらにそこに出現した工場や作業場のなかでの分業が進化していくことを意味する。こうして、ほとんどの消費物資が匿名の他人を対象とした商品として生産されて交換され、人々は社会的並びに工場内分業の細分化された部門に配置されて、特に工場労働者は、機械の運行に合わせてその補助役のように単一の単純労働に従事する場合が多い。そこでは社会全体としては量的にも速度的にも莫大な生産力が達成されるが、一人一人の生産能力では、封建時代の自給生産における「万能の職人」といった多様な労

1）マクガヴァン報告については、『いまの食生活では早死にする ―アメリカ上院栄養問題特別委員会レポート』改定新版、今村光一抄訳・編、経済界、1988年、末松俊彦『世界の食習慣を調査したマクガバン・レポート』ヘルス研究所、2011年を参照。

2）こうした自給的農民の「万能の職人」的能力は、明治初期においてもなおいきいきと存続していた。その実例については、拙稿「明治期農業・農村論」中村政則編『近現代日本の新視点―経済史からのアプローチ―』吉川弘文館、2000年、所収、を参照されたい。

働能力と比べると、かえって退化さえしているといえよう。

さらに、こうした生産力の発展は、人間のモノに対する心のありようにも大きな変化を与えることには従来ほとんど注意が払われていない。自給的手仕事の生産では、直接家族や近隣者など顔の見える者の幸福や健康のために、使いやすく効能が発揮できるように一つ一つの作業に心を注ぎ込んでいく。ところが機械制の工場での分業化・細分化された工程では、見知らぬ匿名の顧客に対して利益を損なわぬよう機械の運行に気を配るが、作業員が製品作成の全工程に直接従事しているわけではないので、個々の心入れが製品の品質に直接影響を与える余地は少なくなっていく。このことは、作業者の心の負担軽減ともなろうが、一つ一つの作業工程で使う者を思い浮かべながら心を込めてモノを作り上げていくという能力そのものが失われていくことを意味する。

こうしたことは生産工程ばかりでなく消費の過程においても言いうる。例えば、これまでの慣習ではドアやふすまを開ける時は、対側に居る人の迷惑にならぬよう、なるべく音を立てないように気を遣うのが礼儀作法であった。ところが自動ドアが装着されれば、近づくだけで音もなく自動的にドアは開閉する。たしかに便利になったが、もはや内外の人の環境を気遣う必要は無くなっている。「気遣う心」がここでも失われる。

近年の自動炊飯器は、技術改良が著しく、あまりに多機能で便利になり、人間は米と水を入れてスイッチを押すだけで、何もせずに好みの味に炊き上げることができるようになった。だが、ここで大きなものが失われた。それは、かつて人間が持っていた火加減・水加減、そして目を離せないほど微妙な炊き加減の技などの優れた技能ばかりでなく、家族など食する人を思いながら少しでもおいしいコメを炊き上げようという「心遣い」や「思い入れ」が、便利さと引き換えに失われていったのである。

そしてこの論点は、あらゆる技術革新の本質に係わっているように思われる。人工知能が発達して、自動車の自動運転が現実味を帯びてきている。周囲のあらゆる環境をセンサーが探知し、運転操作に連動して人間が関知しなくても車の運転がなされる日がもう目の前まで来ている。これにより事故は減少し、車内で飲酒しながら会話をしたり、移り行く景色を存分に楽しめるメリットが生じ、何より運転の苦痛や疲れから人間は解放される。

しかし、移り行く外部のあらゆる環境を瞬時に察知し、危険を判断しながら、速度・方向をクラッチやハンドルで操作し、同時に空調・音響・各種メーター・ライトにも気を配るという人間の五感を総動員した運転技術は退化してゆくだろう。それればかりではない。外部の人間や建物に気を使い、安全運転を心がける心そのものが消えていくだろう。また五感を総動員して車という総合的機械装置を操縦しながら、スピード感と走りを感じ、外の景色を楽しむという複雑な感興の喜びも忘れられていくだろう。

このように物質的観点からの生産力の発展は、社会全体としての量的基準や便利さや効率の迅速性といった観点からは進歩と言いうる近代の産業社会においても、個々の労働能力や労働に携わる喜び、そこから生み出される製品の質的側面に注目すると、進歩という観念は色あせてしまう。また個々の作業や動作に心を込める鍛錬の機会そのものも減退し、細やかで奥深い心の資質は衰えていくであろう。

唯物史観では、社会主義社会が資本主義社会よりさらに技術力が進歩し生産力が発展することになっているから、こうした人間個人の多面的能力や使う人や環境を配慮し思いやる心の喪失は、いっそう深刻化していくであろう。なぜなら社会主義では、徹底した唯物論的観点から、個々人の多様な質的好みや能力は視野の外におかれ、量的な生産の拡大が人々の需要や好みの実情を配慮することなく計画経済が強権的に行われていくからである。

さらに近代的大量生産においては人と自然の関係も大きく変貌させられる。機械による大量生産には、原材料として莫大な資源が必要である。それは自然を掘り起こし、化学的に分解・加工して機械装置に投入して活用される。資源とはすなわち大地・山・水(海・河川・湖沼等)・大気である。唯物論に徹する社会主義者・共産主義者は、これらを単なる物質と捉えるから、そこに無数の生命が棲み、互いに複雑な相互依存関係を構築して小宇宙のような世界を形成していることに思い至らない。

近代以前の日本人は、その神秘な生命体の総合に親しみと畏敬の念を込めて、山・海・水・火・太陽、稲・蚕等々に神性を見ていた。それは、自然と人間が、直接的かつ多義的に係わっていたからである。例えば、川とは伝統社会においては飲料水や生活用水の供給、水田の用・排水、舟運、漁場、洗濯場、遊び場、そしてゴミの廃棄場等として機能していた。その際、川を汚染しないために洗濯は下流域で行い、また汚染物が流されないような柵などの構築物を設けるなどの配慮が慣習的になされていた。

こうした環境で魚貝類の棲息も保たれ、藻や水草も繁茂して多少のゴミや汚物はそうした動植物による自然の浄化力によって除去されていたのである。「三尺流れれば清水」といった格言もこうした人間と自然との関係のなかで生まれ、また自然の多様な恵みと同時に時として大きな被害をもたらす洪水や日照りの脅威を含んで、自然への感謝と怖れの感情が生まれ、その結晶として「水の神」「川の神」といった信仰心が育まれてきたのである。

しかし、商品経済が進展し、生産力が増大し、近代社会の諸施設、インフラ等が整備されてくるにしたがって、人間と川との関係も大きな変化を余儀なくされた。家庭への水道の普及は、人間の手による川からの生活用水や飲料水の運搬を不要とし、舟運は鉄道や自動車運送に取って代わられて筏師などの水運業者は廃業を余儀なくされた。川での水遊びや水泳はプールが普及するにつれて忘れられていった。さらに産業化のなかで農薬や化学洗剤の使用は川の汚染を招き、漁場・遊び場・生活用水の直接的摂取の場としての川の機能は衰えていった。また農業用水の水路もコンクリート三面張りに施工されて、魚類や水生動植物の生息環境を阻害していった。

こうして日常的な川は、唯一「排水手段」という機能を残すのみとなり、人と川(自然)との関係は、かつての直接的で多義的なものから間接的で疎遠な関係に変質していったのである。こうした関係からは、豊かな恵みをもたらしていた川に対する感謝の感情も消えうせ、「三尺流れても清水にならない」汚染された川の現状を前にしても、水道水がきれいな水を常時供給してくれるので、まるで他人事のように無関心となってしまうのである。日々、川の水量や水質、水生動植物の状態や水面の変化

などに気を配り、育んできた自然への豊饒な感情や、川の多様な性質を熟知してその活用方法を会得してきた知恵も消え失せてしまうのである。「水の神」「川の神」などは唯物論的観点から古臭い迷信として排除されてしまうのである[3)]。

さらに資本主義的生産様式では、まさに工場生産の原材料に供するため、自然から「神」を放逐し、資源としての「物質」を大量採取して工業生産物に加工した。その結果として自然破壊が進展した。そして社会主義社会においては、そもそもマルクス経済学の価値概念には自然の影響力は考慮されず、また「物質的生産力」という概念からは、自然のなかに生命体や神を見るといった旧来の観念は古い段階のアニミズムとして一掃されているから、資本主義以上に生産力＝進歩という信仰に突き動かされて自然をためらうことなく破壊していくことになる。社会主義社会における環境破壊とは、自然をモノ化して扱い利用する過程が資本主義以上に進展することに起因している。

以上みたような人間が長年自然やモノとの間に培ってきた「物心一如」の関係の解体と希薄化の過程は、資本主義社会、社会主義社会ともに、近代化にともなう分業の進展と機械化・専門化の拡大過程によってもたらされるものである。だが、上記のような事態のマイナス面を是正していく可能性も言論や思想・政治の自由が保障された近代社会では保持されている。それは、環境悪化の実態と情報を市民と政府（中央・地方）・行政機関・企業の間で共有できる自由で公正な討議機関（議会）が存在しているからである。戦後高度経済成長期に、我国にも公害列島というおぞましい現実が現出したが、それに抗する住民運動、消費者運動に政府や自治体が法整備で応え、企業も環境浄化を促す規制や技術開発を行って環境浄化型の生産システムと新製品を産み出して新たな市場を開拓していった。

また機械化やIT等の技術革新の一方で、手仕事や職人技、自家農園や自給的領域の意図的拡充の試みがみられるのも、そうした価値観の存続を可能とさせる言論・情報・批判の自由が保障され、協調と協力の精神が保全されているからである。さらに、日本では、自然との対話や共感を基礎に成立する和歌・俳句・茶道・華道などの伝統文化がいまだに健在であることが、自然環境そのものへの無関心・不感症といった事態に常にブレーキをかけ、自然を感じ、情緒を感得する有効な手段として機能していることも忘れてはならないであろう。

しかし、社会主義・共産主義社会では、そもそも自然を、心的要素や感情や精神を取り除いた「物質」としてしか、すなわち工場生産のための原材料としてしかみないし、環境破壊の現状を正しく把握し改善策を施すための、住民（消費者）・企業・政府行政機関との間で共有できる自由な言論と情報公開の場が実現しておらず、一党独裁のもと、いっそう肥大化し、専制化・強権化した共産党支配下の官僚組織による計画経済や統制経済が支配的であるので、自然環境破壊の是正は本質的な難点を抱えているといわざるを得ないだろう。また自然との共生関係のなかで育まれてきた伝統文化も社会主義体制では徹底して破壊されるので、伝統文化が保持する自然破壊の防波堤機能にも期待することはできないのである。

2）上部構造の発展論について

上部構造に関しても、様々な質的・文化的観点からみる時、そこに進歩発展の概念を安易に当て

3）桜井厚は、滋賀県高島郡の前川を事例に、戦後、簡易水道が導入されたことにより河川と人間との関係が、多義的直接的関係から一義的間接的関係に移っていくことを実証的に示している（桜井厚「川と水道―水と社会の変動―」鳥越皓之・嘉田由紀子編著『人と水の環境史』御茶の水書房、1984年、所収）。

はめることが困難であることがわかる。

まず政治形態に関して、卑近な例を挙げれば、日本の江戸時代の治世を見れば、対外戦争も植民地侵略も行わず260年余もの長期間にわたって平和が維持されたことをとってみても、同時代の欧米諸国が、市民革命を断行したにもかかわらず（いや、それゆえにか）非ヨーロッパ地域を侵略し植民地として独自の主権・人命・文化・経済を破壊していったのと比べると特筆して評価されてよい、と思われる。江戸幕府の管轄と指導の下で武士から庶民に至るまで教育が行き届き、各藩では地域特有の特産物の生産が発達し、整備された舟運・陸運・通信伝達網を介してそれらは全国で交易され、植民地を持たずとも国内交易を通じて豊かな自国経済の発展を実現した。コメの生産も水田開墾と品種改良によって増大し、基本的に食糧自給を達成した。こうした点を考慮しただけでも、同時代の西欧諸国や後の日本の治世と比べても決して劣らない統治を行っており、その政治体制を単に遅れて劣ったものとみなすことは出来ないだろう。

まして上部構造のうち文化や芸術、美に属する面をみれば、下部構造の発展とともに、質的価値の面で発展しているとはとうてい断じがたい。古事記・日本書紀、万葉集・源氏物語・古今和歌集・百人一首・平家物語、俳句、茶道、華道、能・狂言などは、すべて古代から封建社会に生み出されたものである。これらはいずれも、前述したように自然やモノとの人間の心の交流すなわち「寄物陳思」の情緒のなかから生み出されてきた日本文化の中核をなすものであるが、唯物史観にしたがえば近代より劣った歴史段階の生産様式・搾取社会に照応した遅れた文化ということになる。

8世紀初頭に編纂された古事記・日本書紀は、江戸時代に本居宣長・賀茂真淵、水戸藩の水戸学等により研究が深められ、日本本来の大和心を探求する国学や尊王思想として確立され、近・現代においても、国家学・歴史学・民俗学・文学等の分野でさらに研究が深められ、歴史認識の立場を超えて日本の天皇を中心とした国柄、国家創建の歴史等を伝える古典中の古典としての地位を得ている。万葉集ではすでに百姓や防人・女性も含めた古代人の自然観や人生観が詠みこまれ、江戸時代の本居宣長・賀茂真淵・契沖などの研究でその意味が再発見され、明治以降も正岡子規・斎藤茂吉・折口信夫・佐佐木信綱・土屋文明・犬養孝ら歌人・国文学者・国語学者らによってその伝統が継承され、今日さらに隆盛を見ている。

13世紀の初頭、新古今和歌集はじめ多数の和歌集の編纂に携わった藤原定家が最後に編んだ百人一首は、定家没後日の目を見なかったが、230年後の15世紀の終わり、応仁の乱で乱れる世相のなかで、連歌師・飯尾宗祇によって、ここにあるべき日本の姿が示されているものとして改めて発掘され、その弟子三条西実隆によって、多くの武将から庶民に至るまで広められたという。江戸時代には、カルタとして貴族から庶民の子供まで愛され、今日ますます愛好家を勝ち得ている[4)]。

11世紀の初頭に貴族社会の複雑な人間関係や恋愛の相克を、紫式部という女性の感性から壮大な物語として描かれた源氏物語も、平安時代のみならずその後の諸文学に多大な影響を与え、現在では日本はもちろん海外においても数々の現代語訳・翻訳を得て世界的名著として認められ、多くの作家がその現代語訳のなかで独自の解釈を試み、自身の作品創造にも影響を与えている。

4）小名木善行『ねずさんの日本の心で読み解く百人一首』10～11頁、彩雲出版2015年。

16世紀の戦国時代、新旧勢力や地域勢力が戦闘を繰り広げ、人心が荒廃し自然が破壊された戦乱の世の渦中に生まれたのが、千利休によって完成された茶道である[5)]。それは、茶室において主客の交わりを中核として、立居振舞を基礎に、人と人との和、人と自然との和、人と日常用いる器物との和を、稽古や茶会を通じて体得していくもので、戦国の世で荒んだ人心と自然を回復し、その調和を一つの文化にまで高めたものであった。その後江戸時代になると古田重然（織部）・小堀政一（遠州）・片桐貞昌(石州)・松平治郷(不昧)・井伊直弼(宗観)等の大名茶人が現れて幕府や各藩の教養・文化・教育修練の中心に置かれ、長期にわたる人心の平和と自然美に即した芸術の興隆に大きな役割を果たした。明治期以降には、益田孝(鈍翁)・原富太郎（三渓）・松永安左衛門（耳庵）・高橋義雄(箒庵)・小林一三(逸翁)等の財界人が茶道文化の担い手となり、現代でも物質文明のなかで荒廃する人間の心の回復、自然との調和、美の日常化をもたらす総合文化として見直されている。

以上概観しただけでも、遠く古代・中世に生まれた詩や物語や文化・芸術も、科学技術が未曾有に発展した現代人の心を、数百年、いや千年を超えて感動させ、共感を呼び起こすのである。上部構造が下部構造に照応したものであり、過去のものは今より劣っているものであるならば、そうした時代を超えた感動は呼び起こされないであろう。そしてそうした伝統文化は、その本質を保持しながら時代が進むにつれて、モノと心の間の物心一如の関係が崩れるにしたがって、そうした関係の回復を求める新たな時代的要請のなかで見直され、再発見されてその意味が深められ、新たな時代に即したものとして改良されたり付け加えられたりして生き続けてきたのである。

ところが、『共産党宣言』においては、それら「古い思想の解体は古い生活諸関係の解体と同一歩調をとる」とされ、その実例として「古代社会が破滅に瀕していていたときに、古代諸宗教はキリスト教に征服され」たことや「十八世紀にキリスト教的思想は啓蒙主義の思想に敗れた」ことを挙げている。

そして、「共産主義革命は、伝統的所有関係とのもっとも根本的な決裂である。この革命の発展行程のなかで、伝統的思想ともっとも根本的に決裂することはふしぎではない」と宣言するのである。こうして共産主義者は、社会と歴史をすべて階級搾取と階級闘争として理解し、上部構造である意識諸形態をすべて階級支配の思想と捉える立場から、『共産党宣言』の時点で、その歴史貫通的共通意思である伝統思想ともっとも根本的に決別すると明言していることは改めて注目しておいてよい。

たしかに、そうした文化を階級支配のために利用する支配者もいたであろう。だがそれが可能なのも、こうした多数の人に受け継がれ受容される貴重な要素をその文化が有しているからにほかならない。そして、時代が経るなかで、様々に再評価され、リメイクされながらも現代にいたるまで継受されてきたものが伝統文化にほかならない。

マルクス主義者は、こうした人間が長い時間をかけて積み重ね、育み、再発見して世代ごとに継受してきた文化の価値をまったく重視しないばかりか、そうした過去の人間がそのときどきの様々な経験から学び、育んできた知恵の結晶から学ぼうとしない。過去から続く伝統文化を、古く劣った生産力の時代に照応した遅れたものとしてしか評価

5）なぜ我欲と支配欲が横溢し人心と自然が最も荒廃した戦国時代に茶道が完成したのか、その意義をいま一度深く考察する必要があると思われる。藤木久志は、戦国の世を統一した豊臣秀吉の施策を、武力による強権をバックとしつつも、戦国大名には惣無事令、村落へは喧嘩停止令、百姓へは刀狩、海上秩序には海賊停止令をもたらして、社会各層・各界へ上から平和令を制定して、絶えざる戦闘による報復の連鎖から救い出し、平和の秩序の下に社会を統合していった様を見事に描き出している。私は、その平和策の一つとして秀吉が奨励した茶道を付け加えるべきと思っている。上記のような各種の平和令は確かに重要であるが、戦闘によって肉親・隣人同士が敵対し、山野は踏み荒らされ、荒廃した人心をどう

できないから、「伝統的思想ともっとも根本的に決裂する」ために、それらを破壊していったのである。

ロシア革命や中華人民共和国の文化大革命のなかでどれだけの貴重な伝統文化や近代ブルジョア文化が、自国の文化であれ他民族のそれであれ、それを守ろうとした多くの人々の命とともに抹殺されていったか、その理由がここに潜んでいたのである。

3）社会構成体の移行論について

マルクスは、物質的生産諸力の発展が一定の段階に達すると、既存の生産諸関係やその法的表現である所有諸関係と矛盾するようになり、前者の発展を阻害する桎梏に一変する。この時から社会革命の時期が始まり、階級闘争によってそれまでの被支配階級が支配階級を倒して新たな社会構成体が形成されると説く。

ここでマルクスは「物質的諸生産力の発展」と上部構造の働きを切り離して述べているが、そうした生産力の発展も、すでに述べたように消費者の心理や趣向、消費トレンドや流行、政府の経済政策等、それらをみすえた生産者や経営者による市場開拓や技術革新、製品開発等によって促される。つまりもろもろの心的精神的要素や政府の経済政策などの上部構造の要素と結びつきつつ達成される。上部構造と分離されて生産諸力という下部構造の発展が独立して進展するわけではない。したがって両者を分離した上で、下部構造の生産力の発展と上部構造の所有諸関係が矛盾に陥るという考え方自体が説得的でない。

また、そうして増大した生産力による余剰がすべて資本家・経営者・地主・領主等に一方的に蓄積され、生産者である労働者・農民・農奴等にほとんど還元されなという剰余価値学説も、前者の剰余価値創造の多大な貢献を考慮していないので首肯しえない。ただ、前者の取り分が不当に多すぎて、後者に剰余が僅少にしか分配されないような事態には、いわゆる階級対立・階級闘争が発生し激化する場合があり得よう。

だが、たとえ階級闘争が激化したとしても、それがただちに現生産様式の廃棄と新生産様式への転換に結びつくとはかぎらない。経営者側の対応があり、政府側の政策対応があり、問題が協議されて妥協が図られていくからである。労働環境の改善や生活と生計の再生産に関しても両者の間では、対立や闘争だけでなく協議や調整や妥協がなされる場合が往々に見られる。剰余価値の分配関係においても、つねに被支配階級が暴力的に抑圧されているわけではない。まず生産手段の保全や公共財の維持にも意が払われ、被支配層への所得還元に結び付く寄付や贈与も行われ、両者間の利害に協調と調整が図られて富の平準化が志向されるからである。

また政治的な体制変換は、経済的要因や階級対立や階級闘争だけが要因で起こるものではない。マルクス・エンゲルスは『共産党宣言』の第1章「ブルジョアジーとプロレタリアート」の冒頭で、何の実証もなくいきなり「今日までのあらゆる社会の歴史は、階級闘争の歴史である」と断言するが、我々の日常生活を見てもわかるように、階級的利害に立脚した階級間の闘争は、どれほどの比重を占めているのだろうか。

また階級対立よりも、地域、民族、職種、宗教、人種、男女間の差異等が、複雑に絡み合って軋轢や対立が惹起され、それが政治問題化するのが社会の現実であろう。マルクス主義者は、おそらくそうした様々な分野の中にも階級対立が孕まれて展

慎め、相互尊敬に導いて秩序を回復させていくのか、この点への配慮が無ければ上記の平和令も十全には機能しないと思われる。茶道も、高額な茶器の売買など、富や権勢の顕示欲の一端に供された面もあるが、茶道の根底にある「茶禅一味」の精神の本質を重視すべきであると思われる。

開していると説くのだろう。だが、例えば、A地域とB地域の間で激しい地域間対立があって、その帰趨が両地域に存在する企業の利益に大きく影響を与える場合には、企業内の労働者はむしろ企業家と連携してまず自己の地域的利害の獲得に協力する場合が多いのではなかろうか。自己の生活が立脚する共同体や地域社会の存続と発展があってこそ企業活動も、労働者の生計も保証されるからである。その地域が国対国、民族対民族となった場合にも同様なことが言えよう。マルクス主義者は社会関係の複雑な質的要素を捨象して階級関係に単純化し、すべてを階級対立に収斂させようとするが、それは歴史上も現実社会においても事実とは合致しない。

では、生産力の発展にとって旧生産関係が桎梏と化し、社会革命の時期が始まるというのは、どのような指標によって確認できるのだろうか。例えば江戸時代に関しては、商品経済の発展を背景とした百姓一揆の増大とその質的変化等が、幕府の政策に一定の影響を与えたことはあろうが、維新の動乱を招いたのは、幕末列強の圧力という外圧が決定的な要因として作用し、開港をめぐる幕府内部の対立が、それと連動した各藩を巻き込んだ対立にまで発展し、危機感を抱いた下級武士層が主導して攘夷―討幕運動が激化して遂に維新に至ることは周知であろう。

幕末の経済発展の度合は、マルクス主義者によっても「小営業段階」にとどまっており、急速な資本主義経済の導入は、まさにその後に誕生した維新政権という上部構造が駆動して行われたことであった。したがって経済的な生産力と生産関係の矛盾による階級対立が直接明治維新を招いたという図式は、当てはまらない。

どの時代、どの地域であれ、一国内部の支配層対被支配層間の対立、支配層内部の対立、それらに地域的・宗教的・思想的対立が絡み合って社会は変動していく。さらに国外からの外圧や対外戦争、侵略や征服、地震などの災害、何より内乱や闘争を導く傑出した指導者の登場等々、・・こうした複数の要因が複雑に連動し合って歴史は動いていく。しかもそれが新たな社会構成体の誕生に至るか、旧体制内部で妥協的に終焉するか、あるいはまったくの混乱状態に陥るかは、それぞれの要因の相互作用の度合いによって決定されることであろう。マルクス主義の公式のような図式がすべての地域、時代に当てはまるわけではけっしてないのである。

さらに唯物史観では、社会構成体の移行が階級闘争による革命という形をとることが人類史の進歩であると捉えているが、この点も首肯できることではない。ロシア革命や中国における社会主義革命が数百万～数千万単位の犠牲者を出したことを措くとしても、自由・平等・博愛の理念を謳った人権宣言を採択したフランス革命においても、共和制を実現した革命政府が国王一族ばかりでなく政敵を次々と反革命のレッテルを貼って絞首刑に処し、徴兵や重税を課された農民・庶民が大規模な反乱に立ち上がった際にも30～40万人とも言われる犠牲者を出して残虐に弾圧した。

イギリスでも革命の中心的指導者であったクロムウェルは、チャールズ一世を倒した後アイルランドに侵攻して土地を奪い、多数の民衆を虐殺し、のちにアイルランドをイギリス領に組込んだのである。市民革命こそ多大な犠牲を伴ったことを忘れてはならないだろう。

日本のマルクス主義史学では、戦前からこうした市民革命の影の部分を捨象し、人権宣言など光の部分を軸にフランス革命を市民革命の典型として明治維新を論じ、絶対主義の成立であるとか、市民革命であっても不徹底なものであったとか、低い評価を下してきた。たしかに明治維新の過程でも戊辰戦争が起こされ、すでに恭順の意を表していた会津藩など東北諸藩を討伐して1万人余の犠牲者を出すなどの汚点はあったが、一般民衆への大弾圧などは見られず総じて動乱による犠牲者は英仏と比べはるかに少なく、国王が惨殺されたり、周辺国へ攻め入って蛮行の末植民地にすることもなかった。「革命」という前時代の伝統や支配層すべてを悪と断じて切捨てていくことが善であり、歴史の進歩であるとする見方そのものが一面的であり、前時代の優れた点を継受しつつ新たな危機的情勢に対応して諸階層の共助をはかりながら改革が進められていく体制変化のあり方が改めて評価されるべきと思われる。

また、日本では、天皇が直接政治に携わる天皇親政は永い治世においては常態ではなく、実質の政治は貴族や武士に委ね、自らは古来より連綿と連なる男系による皇統継受のもと、「おおみたから」としての民の安寧と平和を祈り、民との相互尊敬と信頼を礎に、有徳の権威と神格を基礎に君民共治の歴史を築いてきた。その統治のあり方は、人民と土地を私的に支配する有力領主の一族が王権神授説によって絶対君主となり、その支配の正当性を人民との契約により確保しつつ絶対主義体制を築いた西洋諸国とも異なる。また血統や階層も民族も問わず前皇帝を打倒して政権を簒奪した者が天から天命を与えられた天子として君臨することが易姓革命の名によって正当化されるが、土地と人民を私物化した治世がやがて大乱や大殺戮をもたらしてしまう中国の歴代皇帝の統治とも本質を異にするものであった。

江戸時代の天皇は政治的権力はほとんど無かったが、幕末の危機に際して、万民をまとめる救国のシンボルとして政治舞台に登場し、幕府から大政が奉還されて王政が復古され、国是として五箇条の誓文が示されて、そのもとで基本的に一君万民一致協力して危機に対処すべき政体が整えられていったのである。それは、けっして西洋流または中国流の革命ではなく、危機に対応した日本独自の近代への対応過程であった。

それでは、マルクス・エンゲルスは、資本主義から社会主義への移行をもたらす社会主義革命をどのように展望したのだろうか。以下、エンゲルスの『反デューリング論』等によって見てみよう。

資本主義的大工業では、生産手段が大工場に集中され、労働力を代替して機械の改良と拡大を図り、市場での競争戦に対応しながら生産力は未曾有の域に達する。しかし、それは社会の需要を超えて恐慌に陥り、生産手段は過剰となって遊休状態となり、労働者は市場に再び投げ出されて、貧困・労苦・奴隷状態・無知・野獣化・道徳的堕落が蓄積されていく。資本はこうして労働者を、好況・不況時に合わせて吸収・輩出することができる産業予備軍として自己の支配下に置く。ここに生産の社会的性格と取得の個人的性格との矛盾が拡大し、それは資本家と賃金労働者との対立に発展する。

機械の拡充によって資本の高度化がもたらされるが、それは可変資本部分の比率を低下させて利潤率の傾向的低下を招いていく。そうしたなか激化する競争戦に勝ち抜いて利潤を確保するため

企業の合併が進展し、株式会社化、トラストによる価格調整、国有化によって生産と交通のいっそうの社会化が図られるが、資本家的富の取得と労働者の搾取関係は変わらない。ここに工場内の組織的・社会的側面と社会全体の無政府的側面の矛盾が著しく拡大される。

ここに至ってプロレタリア革命が日程に上り、労働者階級が国家機構を掌握し、資本家の手に握られていた生産手段を国有化し、計画経済を行う。これ等の施策によってこれまでの搾取関係から人間は解放され、社会的生産の無政府状態は消滅していき、階級支配の機関であった国家はやがて死滅していくとされる。

だが、ここでは全体として、資本主義体制の下で、新たな機械やエネルギーが次々に開発されて生産費の低減＝価格の低下を推し進めるとともに、イノベーションが次々におこって、機械・部品及び素材生産部門に種々のスピンオフ産業が形成されたり、新製品が開発されて市場が拡張されていくことが考慮されていない。

さらに社会全体の消費拡大にも十分意が払われていない。従来上級貴族のステイタスシンボルとして固定化されていた消費スタイルが、社会の流動化にともなって、上級階級へのあこがれと模倣欲によって徐々に中産階級に、そしてさらに中下層階級まで普及、下降してゆく。広告・宣伝手段と交通・情報伝達機関の発達が新たな消費欲を刺激し、新製品を産み、さらにそのための生産手段の拡充や新企業が創設される。こうしたことは、交通産業やエネルギー産業にも波及し、社会全体の需要は爆発的に拡大し、新機械の導入による技術革新は価格の低廉化を促し、いっそう購買力を刺激してゆく。こうした中で企業業績が向上すれば、それは賃金にも反映され、購買力の増加につながっていく。

企業家の側でも、企業内福利厚生、社会保険等を改善し、国家政策においても様々な労働者保護のための社会政策が施行される。こうしてマルクス・エンゲルスが予見した労働者階級の一方的窮乏化は、恐慌による多大な社会混乱はみられたものの現実によって否定され、最も資本主義が進んだイギリスにおいては恐慌を機にした社会主義体制への移行は遂に実現しなかった。

イギリスの労働党やドイツの社会民主党など労働者の立場に立った政党が出現し、その勢力は議会でも大いに伸長したが、それは労働者階級の福利や生活・労働条件を改善し、労働者階級の社会的地位の向上に資しても、資本家階級を打倒して社会主義・共産主義を打ち立てる方向には直結しなかったのである。

6）周知のようにレーニンは、『帝国主義論』において資本主義の発展は生産の集積によって独占体を産み、大銀行と結合した金融資本が形成されて国内市場を制覇し、より安価な原材料と労働力、広大な市場をもとめて海外へ進出して植民地を獲得して帝国主義となり、植民地と金融資本の勢力範囲の分割と再分割が第一次世界大戦へと発展したと説いた。こうした下部構造における独占体・金融資本の形成が対外的植民地争奪戦を産み、第1次世界大戦という上部構造の激変をもたらしたとする唯物史観に則った説明は、耳目に入りやすく、剰余価値を搾取する資本主義は独占段階で帝国主義に発展し、必ず戦争を惹起するという単純なイメージを定着させ、マルクス・レーニン主義への信奉を支えてきた。だが近年の歴史研究の進捗は、こうした独占資本→帝国主義→植民地争奪のための世界戦争という単純な図式の根本からの是正を迫っている。

例えば、第1次世界大戦の開戦原因について内外の文献を渉猟した共同研究、小野塚知二編『第一次世界大戦開戦責任原因の再検討　国際分業と民衆心理』岩波書店、2014年では、開戦原因を帝国主義列強の対外膨張政策（植民地争奪戦）や二大同盟関係の対立、さらに経済の変化に対応できない古い国際秩序・国家システムに求めたりする通説は、史実に合わず、直接的な開戦原因を積極的に説明しうるものではないと批判している。その上で、当時のヨーロッパが極めて緊密な国際分業関係を結びながら、繁栄というメリットとともに地域衰退や失業といった苦難を共通に抱え込んでいたこと、民衆の政治参加と世論が形成され、社会主義と共に愛国的なナショナリズムを高揚させる民衆心理も増幅され、そうした大きな世論の波が各国の政治と相互作用を奏でながら開戦へ至っていったという複眼的で説得的な論説を提示している。

そして現実の社会主義革命は、「新しいより高度な生産諸関係は、その物質的な存在諸関係が古い社会の胎内で孵化」するような段階に到底達していない、イギリスに比べてはるかに脆弱な後発資本主義国であるロシアにおいて、第一次世界大戦[6]という大混乱に乗じてボルシェヴィキ・レーニンが強引に戦争を内乱に、そして革命に転化する戦略によって暴力的にもたらされたものであった。マルクスは、ナロードニキの革命家であるヴェラ・ザスーリッチに答えてロシアに残る伝統的共同体＝ミールの存在を重視する見解を示したが、ロシア革命では、それとは異なり専制的な集団農場化や食糧徴発、強制的な民族移動等によって農民階級は弾圧され、共同体は解体されていった。

中国に関しては、資本主義経済や議会制さえ十分に発達していない段階で、支那事変以降の全面戦争を契機として、これもコミンテルンの指導やアメリカ・ソ連等の支援を得て、毛沢東という専制的な独裁者によって強引に暴力的に革命政権が樹立された。

要するにロシア革命にせよ、中国革命にせよ、唯物史観の命題とは真逆な方法で達成されたと考えられるが、こうした事態について、マルクス主義の歴史家江口朴郎は、次のように説明している。

氏は、「帝國主義の時代において、それぞれの社会の發展段階が、一國の社會の問題として圖式的觀念的に固定した發展段階では論じ得」[7]ず、「資本主義の持つ國際的契機の問題、卽ち搾取關係従属關係が國際的に擴大されてくること、所謂「不均等な發展」が國際的にあらわれてくる」[8]という基本認識にたって、先進的な帝国主義国家の発展によって従属させられ搾取される後進的な地域がうみだされ、そこに封建的な要素や資本主義の特殊な発展のあり方が新たな意義をもってたえず再生産されると把握する。ロシア帝国ではツアーリ専制体制のもとでの急速な資本主義経済の発展とともにフランスへの産業・金融面での依存・従属という面が現れ、ドイツ帝国との戦争を見据えた軍事力の拡大とフランスとの連携という事態を生み、国内でも異民族の支配と農民の犠牲、選挙権の制限等によって支配を維持してきた。したがってロシア革命は、資本主義体制の打破とともにそうした封建勢力を一掃し広範な民主主義革命を遂行するという本来ブルジョア革命が果たすべき課題を担い、民族的諸問題を解決するという意義を担ったことが強調されている[9]。

たしかに、単線的な一国発展史観ではなく、国際的な不均等発展のなかで支配従属関係が形成され、周辺地域に封建的な要素、専制的な要素が

だがここでは、各国に台頭する社会主義勢力が、基本的に各国・各地域の固有の文物・価値・文化よりも階級闘争や国際的な社会主義世界の実現といった抽象的な理念を前面に打ち出していたことが、郷里や国家の文化・伝統を重んじる勢力の反発・反感を買って、ナショナリズムの台頭をむしろ助長したこと、また好戦的な宣伝を煽ったメディアはいったいどのような勢力であったのかについて、明確な説明はない。こうした点も含め、各国の金融やメディアに絶大な勢力を伸ばし、ロシア革命さえ支援していたユダヤ系の国際金融資本の影響力も無視できない要素と思われる。例えば、ジョージ・アームストロング『ロスチャイルド　世界金権王朝』馬場周二監訳、徳間書店1993年を参照されたい。

7）江口朴郎『帝國主義と民族』東京大学出版会、1954年42～43頁。

8）同前書、52頁。

9）同前書、155−156頁。

再生産されて維持され、その廃棄も含めた民衆解放に社会主義革命の意義を認めようという論旨には一理あるように思われる。だが、氏はそうした過程の中で周辺地域が近代市民革命を経なかったがゆえに、いわゆる法の支配、三権分立、基本的人権といった近代的公共の理念が根付かず、レーニンや毛沢東らの専制的・暴力革命路線を許し、あるいは助長して、民主主義革命どころかツァーリズムや清朝統治よりはるかに暴虐な民衆弾圧や民族浄化、政治・言論・宗教の自由を踏みにじった迫害が行われた点を、どう説明されるのだろうか。結局、剰余価値学説と唯物史観に立つがゆえに、ブルジョア国家を単に支配階級による抑圧機関としてのみ捉えて、そこに育まれた歴史的遺産や教訓に学ばず、政治権力という上部構造がいかに下部構造すなわち実態経済や実生活に甚大な影響を与えるのかという自覚を欠いたまま、社会主義革命成就という大義名分のため恣意的で専制的な政治の暴走が敢行されたことが、解放されるはずの労働者や農民、諸民族への甚大な被害をもたらしてしまったのである。

他方で、先進資本主義諸国の行方を瞥見すると、第一次世界大戦後、ブタペスト、ドイツ（ミュンヘン、ベルリン）、ハンガリー等における社会主義革命が失敗に終わってからは、従来のマルクス主義による労働者階級を前衛とする暴力革命は不可能となった。

その後、新たな社会革命理論をリードしていった思想家たちの一つは、1920年代にドイツのフランクフルト大学を根城に主としてユダヤ人によって結成され、のちナチスの迫害を逃れてアメリカに拠点を移したフランクフルト学派であった。その中心人物の一人であるホルクハイマーは、古典的なマルクス・レーニン主義が、社会の下部構造や革命の主体となるべき労働者階級に焦点を置いていたのに対し、すでに労働者階級さえキリスト教をはじめとする伝統的なブルジョア文化に浴している現実を踏まえ、マルクスの疎外論とフロイトの精神分析論を土台に、知識階級や中産階級に狙いを定め、彼らが担う文化やブルジョア的価値観、意識等に対し、「批判的理論」を展開し、ファシズムに典型的な権威主義国家を批判した。マルクーゼもまた資本主義的産業社会では、科学技術への信仰や合理性のイデオロギー、広告で宣伝される大衆文化と消費至上主義が横溢する管理システムが敷かれ、自由や個性、権力への批判力を喪失した一元的人間が生まれ、労働者階級さえそうした体制に組み込まれるなか社会的少数派が有する「否定の力」に期待を寄せた。

またロシア革命後にロシアに亡命して、そこでレーニン主義―スターリン主義による恐怖政治に幻滅と恐怖を抱いて帰国し、イタリア共産党書記局長となったアントニオ・グラムシも、国家をレーニンのように階級支配のための強制装置に還元せず、官僚的・強制的機構に支えられつつも、教会、学校、組合、マス・メディア、政党、企業など市民社会における政治的・知的・道徳的な指導と同意の契機を重視し、発達した資本主義社会における社会主義革命は、市民社会において長期にわたる陣地戦を経てヘゲモニーを獲得することで達成されると展望した。

また戦後フランスにおいては、アルチュセールがマルクス主義を構造主義的（可変的な表層的社会・文化諸現象の背後に隠された深層的で不変

な構造を探究する思想・方法）に解釈するなかで、近代資本主義社会の再生産が営まれるためには、軍事力・警察力という国家の抑圧装置のみならず、人がシステムの規定に従って、自発的に生産関係の一部に加わるように、学校、情報メディア、福祉的制度、文化的慣行の制度、法的に定められた家族、等々が、国家のイデオロギー装置として機能していなければならないと、考察した。

さらにアルチュセールの教え子でもあったフーコーは、学問や物の認識は直線的に発展してきたのではなく、時代ごとに基本的な「認識枠組み」を通じて固有のスタイルがありそれぞれが断絶していると捉え、もろもろの思想の土台である「言説」の在り方(編成)も，社会的、政治 - 権力的人間事象に関連させて解明する構造論的視座をひらいた。近代特有の権力構造も、国家の諸制度による規制のみでなく個々の内面から生命・生活・生殖まで把握され、従順な身体を持ち自発的に服従する個として管理するあり方を掴み出し、軍隊、監獄、学校、工場、病院は、規則を内面化した従順な身体を造り出す装置と把握された。

このような新たな思想潮流は、たしかにマルクス主義の下部構造規定論、労働者階級前衛論、暴力革命論ではなく、近代社会の文化・言説・認識を含む総体を、その根底から遡上に載せて批判し、市民社会のなかの合意獲得のためのイデオロギー諸装置や個の内面的な服従を醸成するものとして、近代国家の支配・管理・統制等を厳しく批判しているが、近代資本主義社会は、搾取と疎外に満ちた廃棄すべき社会であり、文化や精神は各時代ごとに構築されるものであると捉え、太古から現代にまで連綿と受け継がれてきた各地域固有の伝統文化や近代社会の慣習等をそうした「搾取と疎外」を植え付けるものとして否定的に捉えている点では、マルクス主義の基本認識を継承しているように思われる。

だがここには、古来から人類が営々と築き上げ、継承してきた知恵や文化や制度そのものの価値を尊重し、階層間の相互協力や理解を深め、歴史的に人類が様々な課題を解決してきた経験に学んでより融和的な社会を造りあげていこうとする精神は見られない。近代国家や社会は、隅々まで管理され、「合意」によって統合されたものであり、そこでの種々の文化や言説も、隠された認識の枠組みを暴いて批判されるばかりで、我々を活かし、より向上させるものとして肯定しようとはしない。だが、そうした見方そのものが、実は今一つの縛られた「認識の枠組み」を前提にしており、それは往々にして「ニュルンベルク裁判」や「東京裁判」といった時代の大状況が作りだした一方的な歴史認識の枠組とそれに立脚した権威や言論空間（江藤淳の言う『閉ざされた言語空間』）に依拠している場合が少なくない。またそれらの知は、古代以来積み上げられてきたヨーロッパの知や国家のあり方を前提としており、現存の森羅万象のなかに自然と祖先の英知を見て感謝と恩愛の感情を抱き、各層が共助関係を築き上げていくという、日本が歴史的に育んできた自然信仰や他力本願、「物心一如」、君民共治の精神などもまたそこには感じられないのである。

Characteristics and Problems of Socialist and Communist World Views

a Critical Examination of the Surplus Value Theory and Historical Materialism (3)

Masao Tsutsui

This study adds a critical analysis to the second thesis of historical materialism developed by Karl Marx. The thesis argues that a social structure evolves driven by the growth of material production forces in the substructure. But when these forces reach a certain stage and conflict with the existing productive relations, the resulting class struggle gives rise to a social revolution that eventually shifts to a new social structure with the emergence of a superstructure compatible with the level of productive forces.

The study first demonstrates that while substructure (economy) development can be defined quantitatively, it is impossible to identify the concept of development in terms of individual production capacities, qualitative aspects of labor and products, relationships between matter and spirit, and conservation of the natural environment. It also shows that the superstructure does not apply to the development concept in relation to political systems, culture and arts, and that the entire superstructure is regarded merely as a product of ruling-class domination, with traditional and bourgeois cultures completely destroyed during the process of socialist revolution.

The study rejects the concept that social structure shifts are brought about by a contradiction between the development of productive forces and production relations as well as social revolutions driven by class conflicts, because the concept is based solely on class relations that ignore social elements including ethnicity, community, tradition, gender, and religion. This theory of shifting social structures fails to persuasively explain the socialist revolutions that erupted in Russia and China; rather, these revolutions broke out coercively and violently in countries where modern civil society had not fully developed, thereby depriving many victims of their freedom and human rights.

The Frankfurt School, the Italian Antonio Gramsci, and other theorists argue that unlike violent revolutions, such as the Russian Revolution, the shift to socialism in a capitalist state through a bourgeois revolution requires a long-term "war of position" penetrating civil society to achieve consent and hegemony while criticizing civil society's systems and entire culture. However, this study dismisses these arguments that present little else but denials and criticisms of states and order, while lacking a vision that respects the virtues of the existing systems and traditional cultures to build a harmonious society in cooperation with different classes.